

看板「西国街道」もっと詳しく解説します。

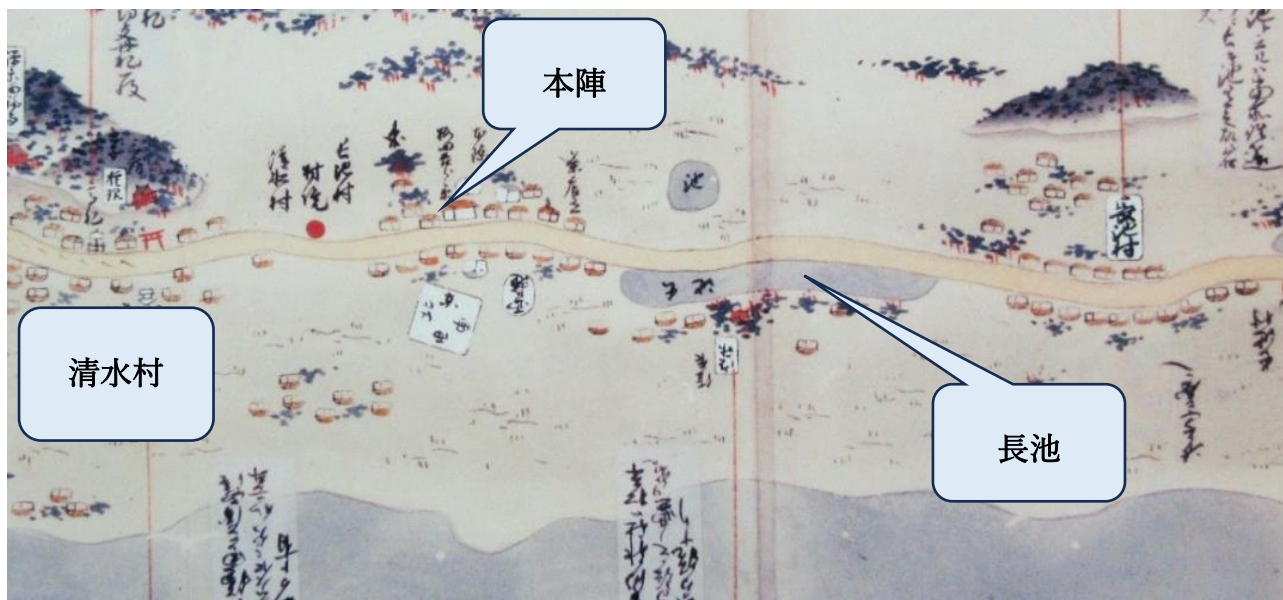
この看板を見ていただき、ありがとうございます。

この看板前の道は江戸時代には九州の下関から京都までを西国街道とよばれ、西国の大名が参勤交代や歴史上の人物を含め多くの旅人が行き来していました。明治時代の中頃には鉄道が開通しました。そして昭和 8 年には国道 2 号線が開通、それまではこの西国街道が西日本の大動脈(幹線道路)でした。

どれほど多くの人やモノが行き来したのでしょうか？ 想像がつきませんね。
この歴史ある道は今も、子どもたちは学校への通学路として使っています。

①昔は 300 メートルもあった長池

下の絵図は江戸時代に萩藩(山口県)の絵師方が描いた『行程記』です。街道筋を描いた旅行マップともいえ、貴重な絵図です。この中に長池が描かれています。現在は小学校の拡張や住宅として埋められ、東の一角 80 メートル弱だけが残っています。



昭和 50 年空中写真(国土地理院)では昔の長池がうかがえます。



②長池本陣

昭和47年頃の写真、『明石の宿場』明石民俗文化調査団/編集・発行より

本陣「梅田吉郎兵衛」から明治3年(1870)には石井家が引き継ぎました。
(*詳しくは『明石の宿場』、あかし市民図書館・西部図書館・魚住まち協でご覧下さい。)
本陣とは大名、公家、幕府要人といった身分の高い人専門の宿ですが、長池本陣は休憩のためだけに使われていましたので、御小休(おこやすみ)本陣ともよばれていました。



今も残る井戸 屋敷の西端にあり



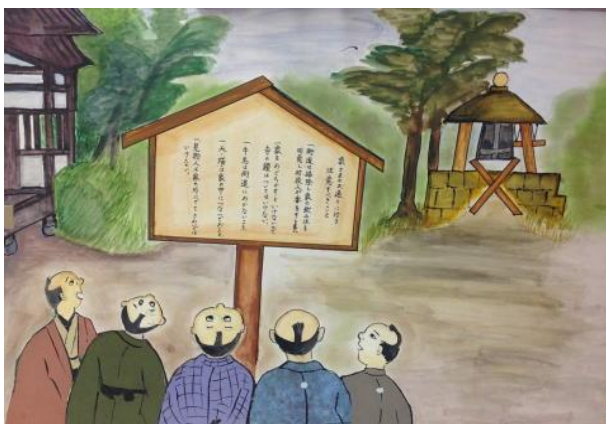
現在の石井家

③江戸時代に象が西国街道を歩いた。

～長崎から江戸までの長旅～

享保14年4月17日に大久保の宿場に象が一泊しました

三木の庄屋安福家に残る『累年覚書集要』に記録されている。それによると大久保に象が泊まった翌18日、安福右衛門は明石まで見物に出かけている。象使いの一人が象にのり、小さな熊手を使って象を歩かせている。飼料はいたびかずら姫草、山笹の葉などであるなど、見聞したことを記すほか、象つき人数は全員で13人一日の道程は5～6里(約20～24km)など細やかに記されている。この記録から西国街道を通ったことはまちがいなく、長池・金ヶ崎を通った。通ったはずなのである。きっと、初めて象を見た村民はビックリしたでしょうと想像するのも楽しいものです。象の宿泊場所は「二頭立ての馬小屋の中仕切りをはずした」という記録もある。



引用資料:紙芝居「江戸に象が来た」 製作:ささご会 東部区民センター
<https://nakano-tobu.securesite.jp/body082.htm>

